

## 千丈山の天狗（三田市乙原）

乙原（おちばら）村（現在の三田市乙原）は、千丈山のふもとにあります。

むかし、六甲に住んでいた天狗が、有馬の愛宕山（あたごやま）天狗岩（神戸市兵庫区有馬町）、山口の丸山（まるやま）（西宮市山口町）、加茂（かも）の金比羅（こんびら）（三田市加茂）を一つの道すじに、ここ乙原の千丈山にも通っていたといわれています。

さて、この村に、吾作（ごさく）という二十三才頃の青年が住んでいました。大変親孝行（おやこうこう）な息子で、農業のかたわら、屋根ふきの手伝いをしていましたが、ある日も屋根へのぼって、わらを職人に差出す下働（したばたら）きをしていました。

昼食時（ちゆうしょくじ）になって、とうりょうが（かしら）、「飯（めし）にしようや。」と声をかけました。みんなは、それにうなずいて、「腹（はら）がへったわい。（おなかがすいた）」「ああ、えら。（疲れた）」など、めいめい、ひとりごとをいながら屋根からおりてきました。しばらくして、みんなを見渡しとうりょうが、「吾作はどうした!。」とたずねましたが、職人たちは、「先におりて手でも洗っているんだろう。」「用を思いついて一走（ひとつぱし）り家へ帰ったんじゃないだろうか。」と、あまり気にもしませんでした。しかし、吾作がどこにもいないことがわかると、大騒ぎになりました。村中総出（むらじゅうそうで）で、山や野原もさがしましたが、発見することは出来ませんでした。

一人の老人が、ひざを手でたたき、「吾作は天狗にさらわれたのじゃわい。きっと、そうに違いないぞ。」と、いうとみんなも、「そうだ。そうだ。」とうなずきました。

吾作の家では、泣く泣く、その日を命日として、供養をしました。「人のうわさも七十五日」の諺（ことわざ）どおり、この大きな事件でさえ、話題の少ないこの村でも、一月（ひとつつき）たち二月（ふたつき）たつにつれて忘れられるようになりました。

それから、三十年余りが夢のうちに過ぎました。

ある日、白髪（はくはつ）の老人がこの家に来て、中の様子をうかがい、留守だとわかると、だまって家に上り仏壇（ぶつだん）の前で、線香（せんこう）をあげて、丁寧（ていねい）に拝（おが）み立去（た）っていきました。



野良（のら）仕事から帰った家人（かじん）がこれを見つけ、急いで、後を追いかけてきましたが、千丈山のふもとで見失いました。千丈山の麓（ふもと）に山仕事に行っていた隣の人にこのことを話すと、「その老人なら、天狗岩で腰をかけて休んでいたよ。」と言いました。また、首をかしげながら、

「そう言えば、吾作さんの若い頃の面影（おもかげ）がどこかあったなあ!。」とも、つけ加えたので、吾作の年老いた父や母は、腰もぬかさばかりに驚きました。

また、何年かたって、家人の留守の間に、だれがあげたのか、仏壇に線香の煙が立っているのを見た人があるといわれています。

この白髪の老人がだれであったのかは、はっきりしませんが、三十年前、天狗にさらわれた吾作ではないかと村人は、みな思い、こんど現われたら、ひっつかまえて、正体を見破（みやぶ）ってやろうと、待ちかまえました。その後、この老人の姿を見た人はいないと言います。

